

「初誕生」の日越比較研究

グエン・トゥ・フーン

要約

世界の生活や文化には様々な風習・習慣があり、それに基にその民族特有の文化を理解することができる。通過儀礼の研究を通じて、人生の精神面だけでなく、発達段階を明らかにすることも可能となろう。その中でも、「初誕生」は人生の最も重要な儀式の一つであり、地域社会の一員になることが明らかになる初めの一步として認識できる。

本論では、「初誕生の日越比較研究」を通じて、産婦神や子どもの発達段階に関する概念および将来世代に期待する親の気持ちなどについて、ベトナムと日本の類似点と相違点を理解し、明確にしていきたい。

はじめに

誕生から死去まで人生には様々な重要な儀礼がある。通過儀礼の研究は、多くの民俗学者や文化人類学研究者の関心を集めてきた。文化人類学や民俗学で研究される『通過儀礼 (initiation, rite of passage)』とは、1908年にフランスの民俗学者アルノルト・ファン・ヘネップ (A. L. Van Gennep) が提案した概念である。誕生から死までの人生の儀礼、つまり分離・過渡・統合の過程を辿り、社会共同体に所属する個人の“社会的属性 (社会的地位) の移行”を証明するための儀式のことである。出産儀礼は、人間の成長過程の始まりとして胎児の段階から個人が少しずつ地域社会に入ることを象徴している。人間の精神面に関わるだけでなく、産婦神や子どもの発達段階に関する概念および次世代への親の期待などについても、ベトナムと日本の類似点と相違点が表れていると考えられる。

1. 先行研究

ベトナムでは、初誕生を含む通過儀礼に関して多くの研究がある。例えば、レ・タイ・ドンによる *Van dai loai ngu* (芸臺類語、1773年)、トアン・アインによる *Phongtuc Viet Nam* (ベトナム風俗、1949年)、ファン・ケー・ビンによる *Viet Nam phongtuc* (ベトナム風俗、2003年)、ニャット・タインとヴァー・ヴァン・キエウによ

る *Phongtuclangxom Viet Nam* (ベトナム村落風俗、2005年) やキ・アイン、ホン・カインによる *Phongtuc tapquancuanguoi Viet xuava nay* (ベトナム人昔今の風習、習慣、2007年) などあり、これらの研究では、通過儀礼を風習・習慣として捉え、その意味について分析している。

赤ん坊の生後1年目の誕生を祝う儀礼、初誕生ともいわれる儀礼は日本の各地に見られる現象である。この行事は研究者の注目を集めてきたが、そのうち高知県の三十余りの集落で行われた宇野の研究もある。宇野は資料を比較分析したが、その結果によると、この地域の初誕生儀礼は、①子どもを箕(みの)のなかに入れること、②泣かせること、③餅を背負わせること、④物取りの占いを行うこと、の四つの要素群からなる。この要素には、赤ん坊の不安定な魂を強化する意味以外の他の意味もある。箕を使うことは豊かな収穫を表し、赤ん坊を立たせる行為は生後一年の時期を無事に乗り切ることを意味する。赤ん坊をわざと泣かせるのは地域社会にもうひとつの新たな成員が誕生したことを示し、旅装束や旅人のイメージは「あの世」からこの世へと旅してきた姿を表していると思なす¹。

また、近藤直也は著書『「鬼子」と誕生餅——初誕生儀礼の基礎的研究 九州・沖縄編』において、中九州・沖縄では満一歳の誕生日当日に子どもが歩くか否かの初誕生儀礼に関する鬼子の考え方について明らかにした。胎内にいる期間が通常よりも長い過期産の子や、生まれてすぐに歩いたり走ったりする子、母を死なせたりする子は鬼子だといわれていた。

また、近藤は日本の山口・埼玉・長野・新潟・京都・鹿児島など各地においてもこの儀礼が見られると証明した。

類似点と相違点を理解するため、日本とベトナムの初誕生について考察してみたい。

2. ベトナムの揺り籠離れ儀式

ベトナム人にとって、初誕生は人生の始まりとして大切に扱われている。初誕生は一年を満たすことを意味し、*le thoinoi* (揺り籠離れ式) とも呼ばれている。出産から1歳の誕生日まで、赤ん坊がよく眠れるように揺り籠の中に寝かせているが、1歳になると、揺り籠からベッドに移動させる時期となる。裕福な家庭なら子ども専用のベッドを買うが、普通家庭なら母親と同じベッドで寝かせることが多い。

産神は民謡で語られる子作り・出産を司る妖精王女であり、*Cung Mu* とは産神に対して謝礼とともに子どもの幸福を祈る慣習である。この儀式はベトナムを含むアジアのいくつかの地域で見られ、具体的には次の時期に行われる。新生児が産まれて3日目 (*ngay day cu*)、1カ月 (満1カ月 *ngay day thang*) の時、100日目 (*ngay*

1 宇野しのぶ「高知における初誕生儀礼の意味」『民俗学』第191号、1992年、148頁。

day tuoitoi)、1年(揺り籠離れ日 ngaythoinoi)の時である。

ベトナムの学者であるレ・クイ・ドン(Le Quy Don)は「芸臺類語(Van dai loi ngu)」の中で次のように書いている。「我が国の風俗では、生後3日目にご飯を茶碗に盛って産神へ供え、礼拝する。1カ月、そして100日たったら、それぞれ一族の祖先に豪華なご飯を供えたり、祝宴を開いたりする。知り合いや親戚は、詩caudoi(平行文)やおもちゃ、子どもの服をプレゼントにして祝う。特に、100日目(day tuoitoi)の儀式は最も盛大である²⁾」。ファン・ケ・ビン(Phan Ke Binh)は、現在、都会では子どもが生まれて3日目、満1カ月目、または100日たってから産神への儀式を行うという。

それでは、産神とは何か。一人なのか数人なのか。そしてこの概念はどこから来たのか。ベトナムの人々の考えによると、子どもは大仙女たち(転生妖精)、つまり12人の女神(12人の産神)から形や肉体が与えられる。よって、その子が生後3日目、生後1カ月目、満1年になると、親または祖父母は12人の産神に供え物を用意し、感謝の儀礼を行いながら子どもの幸せを祈る³⁾。

12人の産神の物語は、グエン・ドン・チ(Nguyen Dong Chi)の「ベトナム神話略考」に語られている。12人の産神の物語は、グエン・ドン・チ(Nguyen Dong Chi)の「ベトナム神話略考」で語られている。この12人の女神の物語は、現在、あいまいにしか知られていない。ある伝説では、玉皇上帝が人間を作ろうとした際に手伝った女神たちだとされる。一方、別の伝説では、玉皇上帝が人間や動物を然るべく造り、その後を任せた女神だといわれている⁴⁾。

12という数は、複数の異なる概念で説明されてきた。ある概念によると、それは人間を創造する仕事に対してともに責任を持つ産神のグループである。また、別の説明によると、産神は責任を分担している。一人は子どもの耳を、一人は目を、一人は手と足を造り、一人は子どもに笑顔を、一人は会話を教える。ベトナム南部では、12人の産神は12年間(干支の数)の出産をそれぞれ順番に担当するといわれているが、他方で1年の12カ月を順番に担当するという考え方もある。

妊娠・出産・教養に関する仕事を一つずつ担当している産神は、次の12女神(十二婆姐)である。中国語とベトナム語訳とグエン・ドン・チの言葉を下記の通り比較してみた。

言葉使いが多少違うところがあるが、ベトナムの12女神には中国の十二婆姐の影響がよく見られる。12産神の座る姿を表した彫像が、ホーチミン市DaKao町にある玉皇上帝殿や他の地方でも見られる。12の彫像は座ったり、子どもを抱いたり、

2 タ・クアン・ファット訳「芸臺類語(レ・クイ・ドン) 第2巻」国務出版社、1972年、27頁。

3 ガオ・ゴク・ラン、カオ・ヴー・ミン『ベトナム人の心霊文化』労働出版社、2013年、103～109頁。

4 グエン・ドン・チ『ホーチミン賞優勝作品』第1巻「ベトナム神話略考」社会科学出版、ハノイ、2003年、72頁。

中国語	ベトナム語訳	グエン・ドン・チの言葉
注生婆姐陈四娘	Chúsinhbà mụ Trần Tứ Nương	Tran Tu Nuong 産神は出産をみる
注胎婆姐葛四娘	Chúthaibà mụ Cát Tứ Nương	Van Tu Nuong 産神は妊娠を担当する
监生婆姐阮三娘	Giám sinhbà mụ Nguyễn Tam Nương	Nguyen Tam Nuong 産神は出産を観察する
抱送婆姐曾生娘	Bãotốngbà mụ Tăng Sinh Nương	Tang Ngu Nuong 産神は新生児を世話することをみる
守胎婆姐林九娘	Thủthaibà mụ Lâm Cửu Nương	Lam Cuu Nuong 産神は受胎を担当する
转生婆姐李大娘	Chuyênsinhbà mụ Lý Đại Nương	Ly Dai Nuong 産神は分娩の時をみる
护产婆姐许大娘	Hộ sảnbà mụ Hứa Đại Nương	Hua Dai Nuong 産神は分娩を補助する
注男女婆姐刘七娘	Chú nam nữbà mụ Lưu Thất Nương	Luu That Nuong 産神は胎児の性別を決める
送生婆姐马五娘	Tống tửbà mụ Mã Ngũ Nương	Ma Ngu Nuong 産神は新生児を抱擁することをみる
安胎婆姐林一娘	Anthaibà mụ Lâm Nhất Nương	Lam Nhat Nuong 産神は胎児の面倒を見る
养生婆姐高四娘	Dưỡng sinhbà mụ Cao Tứ Nương	Cao Tu Nuong 産神は産後の面倒をみる
抱子婆姐卓五娘	Bãotửbà mụ Trác Ngũ Nương	Truc Ngu Nuong 産神は子供の世話することをみる

風呂に入れたり、哺乳瓶を持ったり、子どもにミルクを与えたりと、様々な世話を
する様子が表現されている。12の産神は他の女神とともに奉られており、ベト
ナム人の母系礼拝文化と和合する。

儀式を行い、子どもがよく食べ、早く大きく育ち、常に元気であるよう祈る習俗
以外では、以前、試児俗例があった。

当日、子どもを風呂に入れてから新しい服を着せる。男の子の場合、弓矢、紙と
筆、木挽きなどが、女の子の場合、針と糸、包丁、鋏、かごなどが準備された。儀
式の後、親は子どもを準備した物の前に座らせ、何が好きかを見る。中国人はその
俗例を「試児」という。

朱鷹は『抓周的意义和礼仪』の中で、学者である顔之推の『顔氏家訓 - 風操』を
取り上げ、試児俗例について記しているが、以下、それを元に試児俗例について見
てみよう。

川南には、子どもが満1歳になった日にお風呂に入れて新しい服を着せる風俗
がある。男の子には、弓矢、紙と筆、木挽きなどを、女の子に、包丁、定則、針、
糸、食べ物などを見せ、子どもが何を選ぶかを見てその子が欲張りか誠実か、
愚かか聡明かを判断した。この俗例を試児という⁵。

朱鷹によれば、唐朝から宋朝にかけて、初誕生の習俗はますます流行しており、
当時、富裕な家族は初誕生の儀礼を非常に重視していたようである。家の中央に金
欄の畳を敷き、その上で線香を焚いたり蠟燭を灯したりする。そして、子どもを中

5 ヒイン・チュオン・フン訳／朱鷹『抓周的意义和礼仪』中国民俗文化礼仪、2005年より重引。

央に座らせて、前に並べられた物を選ばせる。また、その日は、親戚や知り合いを招いて宴会を催した。客人は贈り物をし、歌舞が演じられることもあったようである。清朝においては、王宮でも一歳の儀式を執り行っていたようだ。

近代に入ると、中国全体で小誕生日儀式が盛んになった。北京では、子どもを風呂に入れてから新しい服を着せ、様々な物が置かれたテーブルから物を選ばせたということである。筆を選んだらその子は将来知識人になる、包丁あるいは鋏を選んだら労働者になる、算盤を選んだら商人になるとそれぞれ見なされた。川西地方ではテーブルの上に本・算盤・包丁・鋏などを置いた。子どもが本を選んだら、その子は将来きっと勉強が好きになると信じて、皆大いに喜んだようだ。清朝では、鎖も置いていた。子どもが鎖を選んだら、将来は必ず役人になると信じて家族も来客も喜んだということである⁶。

以上、朱鷹の『抓周的意义和礼仪』に基づいて、試児俗例について紹介したが、一歳の誕生日はとても大切で、その子どもの人生が始まる儀式である。各々の家庭で豪華な宴会を催し、産後3日目や満1カ月の儀式よりもたくさんの客を招いた。来客は子どもに（特に子どもが男の子の場合）、また親にも贈り物を持ってきた。現在も、揺り籠離れ儀式いわゆる一歳の誕生祝いは続けられているが、人々の知識や生活水準がより高まったため、以前より儀礼が盛大になっている。新たに生まれてきた一族の一員に対する親や地域の人々の期待を反映している。

3. 日本の揺り籠離れ儀式

ベトナムの揺り籠離れ儀式および産神の概念は中国文化から大きな影響を受けたが、日本は神道から影響を受けている。人間は生まれた時から氏神（氏族の神）と深く関わっており、同時に産神（地域・物事・人生を管理する神）または産土神にも繋がっている。他の神と同様、産土神も具体的な形象を持つものではなく、地方により違いがある。

加えて言うと、産神または産土神は、しばしば氏神（氏族を庇護する神）と間違われる。また、ここで使われる出産の概念は人間の出産だけではなく、物事や土地の創生も含まれている。要するに、日本の産土神の示す意味は広い。また、本神にも具体的な形象はなく、性別もない。

山岳地域には、山の神信仰がある。この神は女性で、山林を管理したり山中で仕事をする人の働きを見守ったりするが、山岳地域の出産を担う神でもある。栽培・収穫期になると、この神は里に迎えられ、田の神に変わる。

子どもが生まれると、産飯を炊いて新生児の枕元や神棚へ供えて、産神を祭る。

ベトナムと異なり、昔、日本には初誕生日祝いの習俗がなかったが、男の子の場

6 ヒイン・チュオン・フン訳／朱鷹『抓周的意义和礼仪』中国民俗文化礼仪、2005年。

合は生後 31 日目に、そして女の子の場合は生後 32 日目にお宮参りの儀式がある。この時、子どもは色とりどりの着物に身を包み、家族のお宮に連れていかれる。一方、子どもの生後 100 日目または 120 日目に、「オクイズメ」(お食い初め)の儀礼が行われる。また、「ハシズロエ」(箸揃え)と「モモカ」(百日)の祝いともいう。この日、母方の祖父の家が買い揃え持ってきた茶碗や箸を産神に祭ってから、子どもにコメを一口食べさせる。その後、家族一同でともに食べる。これには、赤子の健やかな成長を祈るとともに、列席した人々が守るという意味がある⁷。

日本には子どもの初誕生日を祝う習慣はあるが、西洋のように毎年誕生日を祝う習慣はなかった。今日の習慣への変化は、明治時代以降、ヨーロッパの影響の下、日本に新しい法律が成立した後、始まった。しかし、多くの地域では初誕生儀礼の中心は誕生餅と運勢占いである。要するに、ベトナムの *Thu tre* あるいは中国の「試児」(子どもを試す)と似ている。

子どもに背負わせる誕生餅は一升餅といい、円形で、1 升のコメから作った餅という意味であると考えられる。升とは、体積の基準となる単位であり、約 1.5 キログラムに当たる。このような餅は、しばしば初誕生日や長寿祝いに使われ、円形は三種の神器の一つである鏡を象徴している。それで、鏡餅とも呼ぶ。地域により、飾り方は違っているが、サイズは変わらない。ある地域では、二重ね、三重ねの餅を使う。

ここでの一升は一生と同じ発音であり、子どもが一生円満に長生きできるように、一生食べ物に困らないように祈るという意味である。地域により、習俗は違っているが、一般的に一升餅を風呂敷や餅袋に包んで背負わせ、歩かせる。立って歩けるようになるのが早い子どもの場合、重い餅袋を背負うとバランスを失い転んでしまう。ある地域では、一升餅のことを転ばせ餅という。複数の地域では踏み餅の習俗がある。この場合、一升餅を大地にたとえ、子どもに草履を履かせて一升餅の上に立たせ、大地にしっかり足をつけて歩んでいけるよう願う⁸。

ベトナム人の考えでは、歩き始めたり話し始めるのが早いのは良いことだ。歩き始めるのが早い子は将来労働者になり苦勞する、話し始めるのが早い子は出世できると信じられているので、話し始めるのが早い子の方が高く評価される。一方、日本では、並外れて急激に成長するのを忌み嫌う。その子は鬼子だといわれ、地域から追い出さなければならない。子どもに餅を背負わせて転ばせたり投げたりする習俗は日本の特色であり、子どもが普通の平凡な人間になり、地域の人と変わらないことが望まれていた。日本人の考えでは、早くに歩き始める子は親からもすぐに離れるので、忌み嫌われる。これはお宮参りやモモカなどの行事にも通ずることであ

7 大藤ゆき「児やらい」岩崎美術社、1981 年、157 頁。

8 同上。

9 近藤直也『「鬼子」と誕生餅——初誕生儀礼の基礎的研究』岩田書院、2002 年。

るが、このようにして、様々な形で子どもを社会や地域に少しずつ紹介していく。以上のことから、日本人が個人と社会の介入を重視している程度がわかる。

初誕生儀礼には、子どもを試す「エラビトリ」（選び取り）という習俗がある。子どもの前に扇子・筆・金・算盤・鋏などを並べて選び取らせ、それによって子どもの将来を占うのである。例えば、高知県安芸市古井では、お金を取ると強欲な人になる、扇子を取ると出世する、鋏を取ると裁縫上手になる、筆を取ると勉強好きになる、などといわれた。他に、定規は几帳面・しっかり者を示すので、定規を取ると将来大きな家を持つ、スプーンや箸を取ると一生に食べ物に困らず料理人になれるともいっていた。

現代社会では、伝統的なもの以外では、子どものより良い将来を願って新しい物も使われる。例えば、サッカーボール、野球ボール（運動機能の発達、将来に選手になれる）、風船（将来、世界に羽ばたける）、ドライバー（将来、技師になれる）など。

ここで留意すべきは、ベトナムと違って、日本の家庭では子どもが筆や扇子でなくとも、どれを選んでも、喜ばれるということである。同じ儒教の影響を受けているが、ベトナムでは儒士を大事にしていたのに対し、日本では儒士ではない武士や商人も大事にしていたということとも関連がある。これは現代日本人の職業選択傾向からも理解できる。ベトナム人は学位を重視する傾向があり、ベトナム社会には、大卒者が多いが相応しい仕事に就ける者は少ないという矛盾がある。同時に、短期間で専門職に相応しい職業訓練を施す専門学校への入学希望者も少ないままである。大卒の技師は専門的なスキルを持たない、あるいは、多くの技師が労働者の仕事をしなければならないというのが現状である。一方、日本の社会では、今日でも、大学院卒より専門学校や大学の学部卒業の方が容易に企業等に採用される。修士号や博士号を取得した者は、一般企業に就職しにくい。

現代社会では、初誕生に関して日本とベトナムは真逆にある。ベトナムでは、初誕生を特に大切にしており、家の中で行われる場合もあれば、都市ではレストランやホテルで盛大に行われる場合も珍しくない。パーティーだけでなく、選び取りも必ず行われる。一方日本では、初誕生や選び取りなどの言葉さえ知らない人もいて、行わない家族もある。

4. 結論

通過儀礼の一つである産育儀礼は、人間の最も重要な時期を示し、一人の個人が社会に受け入れられ、地域の生活に関わることを認めるものである。そのため、これらの儀礼は、どの地域でも非常に神聖な意義を持つ。ベトナム人は人間の出産を司る神がいると信じているが、日本人は神道の理念を持っており、人間の一生が氏族の神および産土神に密着している。習俗の表出の形が違っていても、どちらも人間の誕生や存在が非常に神聖なものであり、神のご加護を受けていることを表して

いる。違うのは、ベトナムでは主に産神に感謝するのに対し、日本では神に感謝するとともに、人間の生から死までの一生を神に依存しているということである。

「餅背負わせ」「餅踏ませ」や子どもを泣かせることは、日本のひととき目立つ特徴であり、子どもが健やかであることを祈るという象徴的な意味だけではなく、より深い意味合いを含んでいる。それは日本の地域社会における人々の強い結びつきであり、一人が地域の一員として認められるには、その地域のほかの人々から外れることなく、特異であることが許されない、という現状があった。これは「出た釘は打たれる」という日本の諺にも表れている。

子どもを試す風習は中国からベトナムや日本に入ってきた。基本的に共通しているが、この儀式についての親の考え方は大きく異なっており、職業選択の傾向や一定の業種に対する社会の傾向の一部を反映している。

参考文献

1. ガオ・ゴク・ラン、カオ・ザー・ミン『ベトナム人の心霊文化』労働出版社、2013年
2. フイン・チュオン・フン訳／朱鷹『抓周的意义和礼仪』中国民俗文化礼仪、2005年
3. キ・アイン、ホン・カイン『ベトナム人昔今の風俗、習慣』ダナン出版社、2007年
4. グエン・ドン・チ『ホーチミン賞優勝作品』第1巻「ベトナム神話略考」社会科学出版、ハノイ、2003年
5. ニャット・タイン、ヴァン・キエウ『ベトナム村落風俗』東洋出版社、2005年
6. ファン・ケー・ビン『ベトナム風俗』文化情報出版社、2003年
7. トアン・アイン『ベトナム風習』カイ・チー本屋、サイゴン、1949年
8. タ・クアン・ファット訳「芸臺類語（レ・クイ・ドン） 第2巻」国務出版社、1972年
9. Arnold Van Gennep. *The Rite of Passage*. London: Routledge & Kegan Paul, 1960
10. 岩田慶治編著『子ども文化の原像——文化人類学的視点から』日本放送出版協会、1985年
11. 大藤ゆき「児やらい」岩崎美術社、1981年
12. 宇野しのぶ「高知における初誕生儀礼の意味」『民俗学』第191号、1992年
13. 近藤直也「『鬼子』と誕生餅——初誕生儀礼の基礎的研究」岩田書院、2002年
14. 坂元一光「通過儀礼と表象テクノロジー——子供をめぐる民俗表象形式への写真の介入」『九州大学大学院教育学研究紀要』第2号、1999年
15. 坂本正夫「子育て習俗の今昔」『道標』（研究紀要）第27集、高教研倫理部会、1990年